【八朔巡礼物語り】

第5話

尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長
写真家 村上宏治

紀州蜜柑から温州蜜柑へ、そして「聖なる贈り物」へと

江戸時代には種子のある紀州蜜柑は、子孫繁栄を意味する縁起物として好まれ、種のない無核の温州蜜柑は「核無し」の「不吉な蜜柑」と忌み嫌われていました。明治に入るとその縁起の善し悪しは重要視されなくなり、主要果実は紀州蜜柑から温州蜜柑へと変わっていきます。

時は一八八〇(明治十三)年、日本産柑橘の海外輸出はこの年から開始されます。長崎の商人はウラジオストク、静岡県と和歌山県の商人はサンフランシスコに渡り、輸出と現地販売を行いました。当時、明治政府からの保護はなく、柑橘産地の商人が単独で販路を拡大した、と記録に残ります。

日本産蜜柑はアジア(朝鮮・満州)や北米(カナダ・アメリカ)に大量に輸出されました。商人達が選んだそれらの地は、日本人が大量に移民をした土地だったのです。特にカナダでは冬期に新鮮な果物が手に入らず、日本産蜜柑は高価でありながらも、クリスマスには欠かせない果物となっていきます。他国産のオレンジに比べ、皮が柔らかく子どもにも剥きやすい温州蜜柑は日本人移民者だけではなく、北米の人たちにも受け入れられ「クリスマスの聖なる贈り物」として、カナダの風物詩となっていきました。

▶当時の出荷準備中の様子(一部)。木箱に英字で「バンクーバー」の文字が読み取れる。

日本の輸出解禁は田熊の晩柑類が証明

時は過ぎ、柑橘の病気「かいよう病」が世界的に大流行し、その原因が日本から輸入された柑橘にあるのではないかと、密命を受けた調査団が来日し、全国をくまなく調査しました。そして全国を調査した一行は、最終の訪問地として因島の田熊入り。六〇種余りの晩柑類を調べ上げます。

しかしそこに罹患した柑橘が一本もなかったことで、かいよう病は日本の原生でないことが証明され、日本蜜柑の北米輸出が解禁となった事実を知る人は少ないのです。

その調査団の代表は、アメリカの植物学者の権威スウィングル博士と田中長三郎博士でした。彼らがその調査の過程で知ることになった八朔の存在、その優位性を二人の学者が推奨し、密厳浄土寺・恵徳上人と田中清兵衛氏そして、島の人たちの熱意で商品化へと大きく動き出します。

因島来島時のスウィングル博士と調査団一行

田熊の晩柑類は固有種に進化していく環境に有ったのでは

しかし、最終調査の地が何故に田熊だったのかと疑問が生まれます。現在それは私の中で継続しての課題として、調査中であるものの、田中長三郎博士は、粘菌学者の南方熊楠博士に師事したという事実があります。南方は民俗学者でもあり、紀州の雑賀衆・九鬼水軍・村上海賊の関係性を説きもしています。一五九六年に因島で既に、海外から持ち帰った柑橘類の栽培を奨励した古文書の事を周知していたと考えると、植物および柑橘が他の影響を受けずに固有種に進化していく環境に有った事を認識し、最後の調査地としての選択に至ったのではとの推測も、ある意味許されるのではないかと思うのです。継続してこの点は調べていくべき案件と強く意識しています。

調査団一行が帰った後にも、田中長三郎博士は再三にわたり因島田熊入りをし、島の柑橘農家との交流を続けつつ、一〇年以上の月日を費やし、柑橘類の調査を継続しています。その調査レポートは、スウィングル博士と南方熊楠博士の手元にも届けられたと記録が伝えています。

日本の柑橘の輸出を再開させることができた、田熊の六〇種余りの晩柑類が育った具体的な場所は、もうその地を明確にする事はできませんが、大切な史実として、島をもう一度歩いてみたいと思うのです。

ウォルター・T・スウィングル博士
柑橘類分類学の世界的権威の植物学者。

田中長三郎博士
日本の農学者。中でも柑橘分類学の世界的権威。

南方熊楠博士
日本屈指の博物学者・生物学者・民俗学者。

世界的・日本的に有名な柑橘の権威である両博士が、因島来島時に八朔の優位性を認めたことは、歴史的価値と大きな意味のある史実として、より大切にするべき柑橘として認識が深まります。

明治時代、日本の柑橘禁輸が解除されるきっかけとなったのは、
この地に60種余りの固有の晩柑類が自生していた、広島県尾道市因島は田熊でした。
(写真手前は田熊の遠景風景)